

2016.6.1

現代俳句千葉

125号

協会の歴史は 機関紙によって 会長 秋尾 敏



現代俳句協会が設立七〇周年を迎えた。本年十一月二十三日に帝国ホテルで記念行事が行われる。午後一時から始まる俳句大会への参加は無料で、宇多喜代子氏の基調講演や夏井いつき氏らのシンポジウムなど価値ある催しが準備されている。

夜の祝賀会には会費が必要となるが、着席しての食事で、他協会の著名俳人も参集し、思い出に残る会となることは間違いない。千葉県の会員諸氏には奮ってご参加を頂きたいと思っている。

現代俳句協会の設立は、昭和二十二年九月一日。石田波郷、神田秀夫、西東三鬼を中心に三十八名の会員で発足している。当初は「俳句芸術」という機関誌を出していた。それが「現代俳句協会会報」に変わり、その第一〇〇号（昭和五十五年三月）から、現在の「現代俳句」

目次

協会の歴史は 機関紙によって 秋尾 敏	1
定期総会	2～3
俳句大会	4～5
春の吟行会	6～7
諸家近詠	8～10
私の感銘句	11～12
津田沼研究句会報告	13
青葉研究句会報告	13～14
柏研究句会報告	14
新会員・会友紹介 図書紹介 ひろば	15
会員・会友の近況	15～16
掲示板	16

千葉県現代俳句協会会報

誌となった。その年の六月号の巻頭には「千葉協議会創立総会」の写真が掲載されており、千葉現俳にとっても貴重な記録となっている。千葉県地区協議会は、設立と同時にこの機関紙「現代俳句千葉」を刊行した。そのお陰で私たちは、千葉県現代俳句協会の歴史を、設立から今に至るまで隙間なく知ることができる。加えて故大畑等前会長の英断により、創刊から一一五号までの「現代俳句千葉」のすべてが二冊の合本となって残されたから、私たちは労せずして協会の歴史を繙くことができるようになった。これはすばらしいことである。創刊号には横山白虹現代俳句協会会長が〈初心の堅持〉を説き、宮本由太加会長が〈普及と水準の向上〉を語っていて、当時の熱い思いが伝わってくる。

協会の歴史は機関紙に残される。年月が経てば、そこに記載されたことだけが協会の歴史となる。後世に胸を張れる内容を機関紙に残せるよう努力していきたい。

平成二十九年 度

定期総会・俳句大会開催される

平成二十九年三月十九日(日)千葉市文化センターにおいて平成二十九年年度の総会・俳句大会が開催された。並木幹事長の総合同司会で、渡辺副会長の開会の辞、秋尾会長の挨拶に続き吉岡一三氏を議長に選出。総会は会員参加者八十一名、委任状一八七名で定足数を満たした。来賓に現代俳句協会中村和弘副会長、東京都区山本敏倅総務部長、東京都多摩地区山崎せつ子副会長、神奈川県吉田功会長の四名の方々をお迎えした。

定期総会

総会では次の五議案(枠内横書き)について審議し、いずれも可決。高木副会長の閉会の辞を以て終了した。



吉岡一三 議長



秋尾 敏 会長



来賓・顧問の方々



会場風景

【第1号議案】

平成28年度事業報告

1. 行 事

(1) 定期総会および俳句大会

- ① 平成28年度総会 3月20日(日) 出席者 83名
千葉市文化センター
- ② 同上 俳句大会 同上 参加者 85名
- ③ 同上 懇親会 三井ガーデンホテル千葉 参加者 56名

(2) 吟行会

- 春の吟行会 4月29日(祝日)
船橋文学散歩 会場:船橋市勤労市民センター 参加者 78名
- 秋の吟行会 10月30日(日)
小江戸「佐原」会場:香取市佐原中央公民館 参加者 71名

(3) 研究句会

- ① 津田沼研究句会
毎月第2火曜日 午後6時より 津田沼1丁目町会会館
12回実施
- ② 青葉研究句会
毎月第4木曜日 午後1時30分より
千葉市民会館、千葉市文化センター
12回実施 うち2月(墨堤)、9月(向島百花園)は吟行会
- ③ 柏研究句会
毎月第2土曜日 午後1時より 柏市「ハックルベリー」
12回実施

2. 幹事会

定例幹事会

- 第1回 1月26日(火) 船橋市勤労市民センター
- 第2回 5月17日(火) 同上
- 第3回 8月30日(火) 同上
- 第4回 11月22日(火) 三井ガーデンホテル千葉
- 臨時幹事会 4月5日(火) 船橋市勤労市民センター
- 顧問会議 3月3日(火) 京成ホテルミラマール

3. 会報の発行

- 120号(2月29日刊)
- 121号(5月31日刊)
- 122号(8月31日刊)
- 123号(12月1日刊)

4. 会員数等(平成28年12月31日現在)

会員 380名、会友 25名、計405名

【主な異動】

- 入会 13名(新会員10名、転入会員2名、新会友1名)
- 退会 29名(会員27名、会友2名)
- (内) 物故者・会員6名
佐藤信顕、庄司とほる(以上27年度)
大畑 等、渡辺 護、明石春潮子、川井吉二

(3)

[第2号議案]

平成28年度会計報告 [平成28年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円)

費目	予算額(a)	実績額(b)	対比(b)/(a)	摘要
前年度繰越金	1,351,929	1,351,929	100.0	
諸事業収入	1,200,000	1,303,000	108.6	俳句大会、吟行会
助成金収入	750,000	741,000	98.8	本部より
会友費収入	50,000	50,500	101.0	
雑収入	10,000	1,133	11.3	預金利子
合計	3,361,929	3,447,562	102.5	

支出の部

(単位:円)

費目	予算額(a)	実績額(b)	対比(b)/(a)	摘要
会議費	100,000	124,887	124.9	他 幹事会(5回)
会報発行費	500,000	483,869	96.8	4回発行(送料共)
通信費	50,000	54,048	108.1	
行事費	1,200,000	990,226	82.5	俳句大会、吟行会
印刷費	200,000	288,036	144.0	チラシ、総会案内葉書、封筒
消耗品費	30,000	34,736	115.8	
交通費	100,000	119,220	119.2	
交際費	70,000	106,038	151.5	関東ブロック会議、他
雑費	20,000	6,052	30.3	
予備費	1,091,929	0	-	
合計	3,361,929	2,207,112	65.7	

次年度繰越金

(単位:円)

収入合計	3,447,562
支出合計	2,207,112
次年度繰越金	1,240,450

財産目録

(単位:円)

千葉興業銀行野田支店	1,169,477	普通預金
現金	70,973	
合計	1,240,450	

[第3号議案]

監査報告書

平成28年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正當に処理されていることを確認しました。

平成29年1月19日

監査役 吉野 精 (印)

監査役 内田 庵 茂 (印)

[第4号議案]

平成29年度事業計画(案)

1. 行事

(1) 定期総会

- ① 平成29年度総会 3月19日(日) 千葉市文化センター
- ② 同上 俳句大会 同上
- ③ 同上 懇親会 三井ガーデンホテル千葉

(2) 吟行会

- 春の吟行会 4月29日(祝日)
- 吟行地:谷津干潟・薔薇園 会場:船橋市勤労市民センター
- 秋の吟行会 10月 吟行地:未定

(3) 研究句会

- ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 午後6時より
津田沼1丁目町会会館(2句事前投句方式)
- ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 午後1時30分より
千葉市民会館(3句事前投句方式)
- ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 午後1時より
柏市「ハッセルベリー」(5句当日投句方式)

(4) 各地の句会の実施

- ミニ吟行会 1月22日(日)
- 吟行地:新春の南房総探訪 会場:鋸南町立中央公民館

2. 幹事会

(1) 定例幹事会

- 第1回 1月24日(火) 船橋市勤労市民センター
- 第2回 5月23日(火) 同上
- 第3回 8月 未定
- 第4回 11月 未定

3. 会報の発行

- 124号(3月刊) 126号(9月刊)
- 125号(6月刊) 127号(12月刊)

[第5号議案]

平成29年度予算(案) [平成29年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円)

費目	予算額	前年度予算額	摘要
前年度繰越金	1,240,450	1,351,929	
諸事業収入	1,300,000	1,200,000	俳句大会、吟行会
助成金収入	750,000	750,000	
会友費収入	50,000	50,000	
雑収入	10,000	10,000	
合計	3,350,450	3,361,929	

支出の部

(単位:円)

費目	予算額	前年度予算額	摘要
会議費	120,000	100,000	幹事会他
会報発行費	500,000	500,000	4回発行(送料共)
通信費	55,000	50,000	
行事費	1,000,000	1,200,000	俳句大会、吟行会
印刷費	250,000	200,000	チラシ、総会案内葉書他
消耗品費	35,000	30,000	
交通費	120,000	100,000	関東ブロック会議、他
交際費	100,000	70,000	関東ブロック会議、他
本部70周年記念協賛金	381,000	0	会員1名当たり1000円
雑費	10,000	20,000	
予備費	779,450	1,091,929	
合計	3,350,450	3,361,929	

平成二十九年 俳句大会

(後援) 千葉県教育委員会・千葉市・毎日新聞社・千葉日報社

総会を終え、午後からは俳句大会が行われた。参加者は九十名。司会は高橋事務局長とイザベル事務局次長、披露は清水・星野両幹事と徳吉広報部長。

大会終了後の懇親会には来賓四名を含め五十一名が参加、最後に全員で恒例の河内おとこ節を踊り閉会した。司会は徳吉広報部長。写真撮影は午前午後通して細野企画部長。俳句大会の成績は左記の通りであった。

【事前投句(兼選)の部】

●千葉県知事賞

切なさの全長である秋の蛇

●千葉県現代俳句協会賞

櫓の火をとるところ繼いでゆく介護

●千葉市長賞

炎天を抜け東京を抜けられず

●毎日新聞社賞

秋蝶は無声映画に戻りけり

【席題の部】 席題「芹」「笑」

〈入賞者作品〉

(二句の合計点による。掲載句は二句のうち一句)

●千葉県現代俳句協会会長賞

芹の水ひらりと跳んで少女羽化

●千葉県教育委員会教育長賞

固まりて芹は芹なり反戦歌

●千葉日報社賞

干されれば笑うほかない目刺かな

保坂 末子

岡田 淑子

徳吉洋二郎

楠見 恵子

徳吉洋二郎

青木 一夫

加藤 法子

加藤 法子

〈特別選者特選句〉

(秋尾敏特選)

根本草雨がわたしをあたためる

林 ゆみ

(中村和弘特選)

固まりて芹は芹なり反戦歌

岡田 淑子

(山本敏倅特選)

芹を摘む瑞穂国の地平線

門谷 杜人

(山崎せつ子特選)

胸中に風のひだ寄せ芹を摘む

石井紀美子

(吉田 功特選)

芹の水ひらりと跳んで少女羽化

徳吉洋二郎

(武田伸一特選)

福島は無口な人と芹を摘む

越野 雄治

(伊藤希眸特選)

気休めと知る核の傘山笑ふ

古谷 誠司

(塩野谷仁特選)

大笑面と呼ばれておりぬ春の夢

清水 伶

(高桑婦美子特選)

戦争がずかずかずかと芹を摘む

東 國人

(三苦知夫特選)

菜の花菜の花眠りながら笑っている

森村 文子

(山中葛子特選)

大笑面と呼ばれておりぬ春の夢

清水 伶

(横須賀洋子特選)

長寿の家系四つん這いで芹を摘む

金子 未完

(渡辺澄特選)

良寛のいろはの文字芹の水

長井 寛

(並木邑人特選)

山笑うソーラーパネルに裾踏まれ

加藤 法子

(高木一恵特選)

長寿の家系四つん這いで芹を摘む

金子 未完

〈四〇三十位入賞者の作品〉

啓蟄のアラビア文字が笑い出す

羽村美和子

笑いすぎたあとの淋しさ鳥雲に

星野 一恵

海女四人寄れば耳まで笑いけり

並木 邑人

蕾まだ笑いこらえている辛夷

石井紀美子

新しき朝の余白や嬰の笑み

越野 雄治

立つ歩く笑ふ一杯生きて春

上野 紫泉

芹稚し水の狂気を未だ知らず

三苦 知夫

通訳に遅れて笑うチューリップ

木之下みゆき

聖戦という錯覚芹香る

下村 洋子

芹を摘む遠き記憶の泥人形

山崎 幸子

芹洗う母の血筋をさかのぼり

椎名 鳳人

まなぶたのみづいてきたる芹の花

清水 伶

父の死にふふふと笑ふふきのとう

東 國人

芹摘めば水の笑くぼの広がりぬ

高木 一恵

笑う日と泣く日同じ人といふ

渡辺 澄

目刺し焼く妣はいつでも泣き笑ひ

高野 春子

看取り来てたてがみほどの芹を摘む

長濱 聰子

ありありと尾骨芹の水が笑う

加藤 法子

せせらぎに芹摘む尾骨尖らせて

泉 志眞子

芹の水とところどころにご飯粒

楠見 恵子

二十一世紀香りのうすき芹買いぬ

小林 実

百寿を目指す母笑いの種を蒔く

金子 未完

服わぬものに微笑み芹の水

林 ゆみ

過去未来大きく掴む芹の水

佐々木幸子

断層をいま足裏に芹を摘む

塩野谷 仁

肖像の絶対微笑猫の恋

市川 唯子

芹摘むや死は完璧な安らぎです

椿 良松

へその他作品 受付順

仏足石静かに笑い落椿
 春風に元気なパンツ笑つてる
 モナリザの笑みに漂う春愁い
 啓蟄や手練手管のわらいとす
 母さんの食はず嫌いの芹でした
 春風のひらめいており微笑仏
 日のさして菌ざわりゆかし芹なすな
 芹洗う手を洗う世の水に同じ
 天井の雲踏むごとし野芹摘む
 菜の花の町芹沢鴨は要らぬ
 水芹や鷺掴みする男の子
 鏡観て作り笑ひや花の冷え
 蝌蚪の水溺れる前の笑いかな
 芹和える残り香まとい手酌かな
 芹の根と人間の根を比べてみる
 百日や梅咲くように嬰笑めり
 大笑は皮膚より生まれ木々芽吹く
 花粉来て不意に笑顔をさらわれる
 芹の水光る洛中地名論
 芹洗う田水に写る夕日かな
 笑いには笑いを返す黄水仙
 閉経の妻ぎしぎしと芹刻む
 ささくさくいまさら笑うふりなんて
 ロマン派に加わり芹を摘んでいる
 放課後の笑ひ声なり桜時
 芹のあるところいつも蛇のゐし
 たんぼの架逝くときは笑ひたし
 この頃の誰も採らなくなつた芹

池田 博臣
 竹中 華那
 井上けい子
 吉田 功
 横須賀洋子
 山中 葛子
 山崎せつ子
 高桑婦美子
 伊藤 希眸
 松崎あきら
 三須 民恵
 内田 庵茂
 イザベル真央
 なかもと淑子
 秋尾 敏
 武田 伸一
 中村 和弘
 山本 敏倅
 小林 俊子
 小高 稔
 小野 功
 細野 一敏
 林 阿愚林
 青木 一夫
 中嶋 三雄
 片岡伊つ美
 高橋 健文
 吉岡 一三



句会風景



事前投句の部入賞者 (左より、敬称略)
青木一夫・加藤法子・秋尾会長・徳吉洋二郎・楠見恵子



席題の部入賞者 (左より、敬称略)
保坂末子・秋尾会長・徳吉洋二郎・岡田淑子



懇親会フィナーレ

水彩の色もはじけて根白草
 春の海かぼんこぼんと波笑ふ
 桜咲き野外舞台の千葉笑
 芹摘みの婆はお尻を北上川に
 教卓に芹一束のメッセージ
 木れんの笑いに揺れる青い空
 三月や笑うことは生きること
 モナリザの笑み貴女にたまされた春
 再会を微笑で返す花明かり
 芹匂う吉永小百合いるように
 うそぶいて呵々大笑の葱坊主
 毒と薬一音ちがい芹の水
 山の端の瀬音高まり田芹かな
 何が転ぼうと笑ひ花辛夷
 笑笑でちよつと一杯春遅日
 遠き日の畦に地藏と芹なづな

関根 信三
 鈴木まんぼう
 高橋 博
 高橋 由樹
 山中 頼子
 高橋 宗史
 圍 喜江
 吉野 精
 戸邊 光一
 森村 文子
 細根 栞
 重田 忠雄
 矢野 忠男
 白木 暢子
 野口 京子
 村上 澄子

くすくすと笑い上戸の春を抱く
 皇后さまのように屈み笹の芹
 泣きながら微笑むことも葦草
 快活に摘まれていたる芹若葉
 芹田踏み叱られていたる猪八戒
 春風を掴み損ねて膝笑ふ
 嘸みしめる野芹の甘き母在りし
 逃げ水やへへののもへじ大笑
 芹摘む子水陽炎の国の中
 遠き日のあわきを掬ふ芹の水
 房の山青空見上げにと笑う
 小賀玉の花の王冠卑弥呼笑む
 芹採りや昼食マフィン持つて来て
 芹の水にごりしままに香を放つ
 父の墓土筆一本笑いをり
 一トンも太つておれば芹の笑み

大見 充子
 小川トシ子
 神作 仁子
 森須 蘭
 愛甲 知子
 福田志津子
 股野 久子
 栃木 きよ
 古谷 誠司
 袴田 菊子
 金子 こう
 長井 寛
 増田 豊子
 小多田文子
 坂間 恒子
 門谷 杜人

春の吟行会

「谷津バラ園」〜「谷津干潟」を巡る

会場 船橋市勤労市民センター 平成二十九年四月二十九日(祝日)



谷津バラ園全景

快晴の下、参加者は七十名。集合場所の習志野市の京成谷津駅で下車、懐かしさを感じる商店街を通り抜ける。「谷津バラ園」に着。入園料は六十五歳以上が半額であり、多くの人が恩恵を受ける。先ず満開の鉢植えの牡丹の出迎えが始まる。園内は整然とした回廊庭園である。薔薇は生き生きとしていたが、まだ開花には早過ぎて数輪しか咲いていない。そんな中「ローサウチヤマナ」という薔薇はピンクの五弁の花が満開。他に西洋石楠花は淡紅色の花が見事であり、椽の花やハンカチの花など初夏を思わせる花々が咲き誇っている。

園を出て外の垣根に沿って奥へ進むとラムサール条約湿地認定の「谷津干潟」に出る。そこには海に沿って数本の根上りの黒松が海らしい風情を見せる。潟は干潮の時間には少し早かったが、低くなつた海面には石蓴藻が浮かぶ。遠くに野鳥が見え近くには鷺が杭に止まって居て、遊歩道沿いには玫瑰の紅色の



バラ園散策



谷津干潟

美しい花が咲いている。京成谷津駅前のお弁当とお団子の店で昼食を買い会場へ向かう。午後一時、秋尾会長の挨拶に始まつた句会は四時に盛会裡に終了した。昨年の吟行会に参加された姉妹、荒居桃子さん(現高一)、奈菜子さん(現中二)が今年も参加され作品にも名乗りを挙げ、会場から大きな拍手が湧く。司会は徳吉洋二郎・木之下みゆき、披露は高橋健文・羽村美和子・星野一恵の各氏。

句会の後、駅ビル地下に場所を移し、懇親会。参加者は三十三名で二時間の飲み放題コース。食べて、飲んで、歓談してあつという間に時間となりお開き。カラオケの二次会組と別れ船橋をあとにする。

(山崎幸子記)

〔二十位入賞者作品〕 (二句のうち一句)

- ① 裸婦像の白き孤独やバラの苑 徳吉洋二郎
 - ② バラの園いつもあやうい王の首 岡田 淑子
 - ③ 水のとっぺん丸まつて春なんだ 竹中 華那
 - ④ ハンカチの木揺れて遠き日の挫折 下村 洋子
 - ⑤ もうすぐ唄ふバラ園のマリア・カラス 高野 春子
 - ⑥ 棘みがく時間下さい薔薇薔 小野 功
 - ⑦ 生命の水平世界蟹は行く 松崎あきら
 - ⑧ 沈黙の干潟守られているらしい 渡辺 澄
 - ⑨ 晩年の出口か干潟満つる音 上野 紫泉
 - ⑩ 薔薇いまだ水の音のみたかぶれり 星野 一恵
 - ⑪ 薔薇咲けば真砂女の海を近くして 笈沼 早苗
 - ⑫ 抜け道は確かある筈昭和の日 小川トシ子
 - ⑬ 薔薇がっほみで石の乳房がくすぐったい 秋尾 敏
 - ⑭ 白鷺は己の影を啄めり 高橋 健文
 - ⑮ 雲が怪しい干潟から鳥の翳 富澤さち子
 - ⑯ 薔薇の村度ヒカソの絵画黙らせる 諸藤留美子
 - ⑰ ぼうたんも崩るる思い出し笑い 寺田美津江
 - ⑱ 花は偽り真実は薔薇の棘 田村 隆雄
 - ⑲ 噴水はジャズ青臭い小宇宙 中村 武男
 - ⑳ 成田発上りの音を吸う干潟 西崎 久男
- 〔特別選者特選句〕
- (秋尾敏会長 特選)
- 水のとっぺん丸まつて春なんだ 竹中 華那
- (山中葛子顧問 特選)
- 隈取りは役者のいのち緋ぼうたん 小野 功
- (渡辺澄副会長 特選)
- 薔薇の花微調整中待てといふ 山崎 幸子

(並木邑人副会長 特選)

バラの園いつもあやうい王の首 岡田 淑子

(檜垣梧樓副会長 特選)

生命の水平世界蟹は行く 松崎あきら

(高木一恵副会長 特選)

薔薇がつぼみで石の乳房がくすぐったい 秋尾 敏

〔その他作品〕 (二句のうち一句、受付順)

薔薇を観る心ばらバラ倦怠期 吉野 精

傷みとは悼みのことさ花水木 高橋 宗史

不服なぞ無し薔薇あり美人あり 細野 一敏

遺産いつまで春の干潟のうつせ貝 高木 一恵

春愁を頬張っているセイタカシギ 並木 邑人

孤児たちのハンカチの木がゆらゆら 楠見 恵子

和一も汗かいてゐる干潟 檜垣 梧樓

薔薇の花微調整中待てといふ 山崎 幸子

校庭に谷津の干潟の風きたる イザベル真央

虚空より白さぎ白さぎ谷津干潟 山中 葛子

潮の香の暗騒音に滲む初夏 平岡 育也

遠眼鏡に風なま臭き潮干潟 内田 庵茂

阪妻の撮影の地やばら香る 中嶋 三雄

風光る干潟のふちにわれら老い 小林 実

初つばめ潮の重たき干潟かな 矢野 忠男

轉の遊路潮の香降ってくる 小林 俊子

谷津の薔薇再会約す雲の上 白木 暢子

一本足打法にするか柵の花 羽村美和子

はびこってアオサ過呼吸電車過ぐ 木之下みゆき

惜春や雲は鬼才か天才か 林 阿愚林

ラムサール後の干潟平和ボケ 三上 啓

彩りの遅れ噴水の遠慮がち

況して紅薔薇彫り深き詩を零す

真白なる乳房に蛇の不屈きな

折鶴を海辺へ飛ばす薔薇の風

両手振りママこつちだよ薔薇ひらく

発熱の双眸持てり今朝の薔薇

鳥風や干潟のはての一本杭

薔薇の名はマリリンモンロー風を抱く

花蘇芳だけが知ってる秘密あり

きなくさきニユースバラ園バラはどこ

ハンカチの花のありかやそぞろ園庭

海の香の際まで若葉の息づかい

鬱屈をぬぐい去る干潟の薄霞

人去りし干潟に残る穴の数

黙すれば事なき痛み薔薇の棘

プリンセス・ローズアイコに未来あり

ありました意中の薔薇の黄の一輪

薔薇園の硬きつぼみは荒蝦夷

バラの味バラのプリンに確かめぬ

バラ園のバラにさきがけてまりばな

水底は闇のさざ波蝸の国

沈黙は華か魔性かばらの園

只中に居て万緑を見失う

バラ刈りや宝探しの谷津園地

ニヒリストに帰る家あり薔薇の門

原潜に耳澄ます魚春の沖

薔薇の園吹き抜けてくる父の風

薔薇園に少し疲れた「チーバくん」

谷津遊路草餅ばかり売れていく

野口 京子

山口 明

富澤ムツ子

松澤 龍一

三浦 侃

赤羽根めぐみ

池田 博臣

大見 充子

三宅たくみ

重田 忠雄

小出貴以子

保坂 末子

金子 未完

長濱 聰子

加藤 法子

近藤 栄子

石井紀美子

林 ゆみ

園 喜江

岡田 春人

鈴木まんぼう

高橋 博

長井 寛

内田 正成

越野 雄治

古谷 誠司

遠藤 寛子

荒居 桃子

荒居奈菜子



荒居桃子さん 奈菜子さん



句会場風景



秋尾会長と上位入賞者 (左より)

- 徳吉洋二郎さん
- 岡田淑子さん
- 秋尾敏会 長
- 竹中華那さん

■秋の吟行会のお知らせ

日時 平成二十九年十月二十五日(水)

場所 流山市一茶双樹記念館

句会場 流山市生涯学習センター

*詳細は次号(九月一日刊)でお知らせ
します。

諸家近詠

靖国に誰待つごとく思い草
大橋を往くやっちゃばの春の色
浄闇に神渡りゆく冬銀河
ほっこりと優しき風味薺粥
鳥帰る机に展ぐ世界地図

関根 信三
高野 春子

縄文の森がねぐらや建国日
針供養動き出したるオリオン座
春雷や砂落ち切つてゐる時計
神の旅メトロノームが動かない
冬帽子蒼穹といふもろきもの

武田 伸一

関ヶ原は雪です獅子舞の大口
寒稽古卑弥呼と寝たことぼろという
種袋種と空気といっしょよくた
煙草寺山修司より詠る
吊橋を猪来るよくよくの夜であり

徳田 悠子

節くれの指を返さむぼたん雪
無垢の魂ほろ苦甘く青慈姑
眠る山そろそろ起こす赤き縞
寒三日月懸けたき人の顔一つ
林道に春の目覚めや猪の鼻

田村 麗

万緑やわたしの中の縁切寺
決断に強弱のあり鳳仙花
一刀で秋を刻みし木版画
雑貨屋の如き多趣味や敬老日
湯豆腐の角がぐらりとぶつかる夜

麦秋の軽石ほどの反抗期
竹の秋純な人からいち抜ける
立ち尽すのみの少年雛まつり
夕闇を着てちんちろになりにゆく
ひらがなのように薄暮の浮寝鳥

寺田美津江
田端 重彦

結ひを借り返して飛驒の秋深む
渾身の力ありけり蛞蝓
素粒子の子細は知らず文化の日
ロッキーマウンテンの一座に小さきケルン積む
夏草や「シエーン」の家の屋根朽ちて

坂本千恵子

匙加減出来ぬ性なり石路の花
冬の虹車椅子から歩行器へ
初御空屋上の青全部吸う
山笑う退院の日の房総路
紅椿負けられません負けません

日吉亜弥子

哲学の本片寄せて内裏雛
宍道湖の蜆と云はれ蜆汁
おはようと窓いつばいの桜ばな
腕白な頃語る君花の雨
青田風シヨートカットの髪にする

荒木 洋子

空はうつぶせ紙風船が舞って出る
今日の草萌え星空へ書き送る
闇を濾過して白桃の育ちゆく
近づけぬ川晩稲の細りゆく
冬行くはけもの出入口一つ

ゆつたりと風通しけり犬ふぐり
母子草最寄りの駅に待ち合わせる
無欲なることの幸せ青き踏む
卒業や柱の傷をなつかしむ
巻爪の指をかばいつ春の旅

中澤 一紅
中村 棹舟

冴えかえる孤りの魂の置きどころ
文通もとだえがちなる花菜雨
城ありし面影もなし花はこべ
濤音を聴くための丘春没日
朝の日のふくらんでくる桜草

中嶋 三雄

戦争は本で知つてるあぶら蟬
かかりつけ医の提灯もある夏祭
船主の望楼高しくだり吹く
乗車位置少しずれたる文化の日
まんえふにぼるんのおほしとほかはづ

普川 洋

日溜りであの世この世の舟を漕ぐ
まだ哲学している手袋の片っ方
見えないものに押され春愁の転びぐせ
立ち話案山子は旅の途中という
アナログの蛇アナログの穴に入る

並木 昌人

流失の公衆電話に人の列
1Fとは原発のこと冴返る
敗残兵兜太「アベ政治を許さない」
赤の他人六人寄れば芋煮会
霜月をこじ開けて来る赤ん坊

永井 奈々

前垂れに包む実梅の立てば寄る
一輛の開のボタンを押して春
足の爪きる着ぶくれて着膨れて
目玉まで青くなりそうソーダ水
ボケットに田辺聖子と空蟬と

畠 淑子

初鶯いのちの果ては確と在り
新横綱「君が代」涙さくらさくら
CT画像歳月映し冴えかえる
榮螺焼く汁の苦みや終活期
ひと鳴りの電話思案のさくら冷え

中村 博子

初波や空の明けゆく漕出式
茅柳の瑞瑞しきも上総振り
みんみんの高く高くと反戦歌
行く秋や無人の醤油仕込室
嶺ひとつ白き丹沢臘八会

樋口 博徳

花の下「す」の字のバランス一輪車
八月の抽斗の「つ」が錆びてきた
帯締めた幽霊が居る「も」の中に
「か」のなかの小さな秋が肩叩く
銀杏散る考える人「ん」の中

中里 結

百千鳥養老の水ひた押しぬ
一山の春の雨音お前立
ためらひの水を分けゆく落椿
金盞花畑に溢れて日は海に
朝の富士遍路の旅もけふ限り

檜垣 梧樓

初東雲「阿佐田哲也」と云ふ雀
達磨忌の砂糖をまぶす胡摩煎餅
石焼芋しずしず通る松濤町
蛭搔きして鈍甲に叱られる
春寒料峭盃がひとつ余る

直江 裕子

轉りを聞き分けているパンの耳
芹の青根つこの先までがふるさと
陽炎の中からひとり出てこない
生きしろは花吹く風にかいた文字
菜の花の埋みに母の毀れゆく

浪本 恵子

スケボアのスイーツと来たる柳の芽
ふるさとやけむりの色の返り花
団子屋の角を曲れば春の風
のびやかな読経の中の柏餅
折鶴に七十年の日焼あり

馬場 益江

冬青空仁王の視野の中にいる
菜園を止める決断すべりひゆ
指文字の尻取りゲーム汗の椅子
杖となる細き上腕夏休み
強行な運動会にして不発

棗 楯伊

正月やルノアールとなりし妻
米大統領とゴルフか紀元節
奨学金返済背負ひて卒業す
お花見や持病の薬手放さず
歓喜せる莓溢れし洋菓子屋

鳴戸 奈菜

春の風やさしく抱かれしその昔
我は吾を好きになりたし残る花
生きるからゴミ出る鴉力アカアカ
春夕べDNAが振り返り
戦争せぬための戦争ありか春の暮

倉岡 けい

白日傘浮雲となる大砂丘
簡潔にも言う素足なればこそ
路を煮る骨が空気を欲しがって
とけてゆくわたし杏のジャム煮つめ
少女期は波立つ海の青ぶどう

林 ゆみ

はくれんは真夜の灯台おかあさん
けむり無き線香のあり亀鳴けり
喪服着ると確かに亀の鳴きにけり
初蝶はきつと青き眼まつるわぬ
さくらさくら筆庄美しき梵字かな

平木智恵子

いつせいの背伸びいぢらしつくしんぼ
錠剤は食後七粒花曇
菜の花に囲まれ仏ごころかな
蟻の国老いばれ蟻は見当らず
忘れつばきわたし扇子は持たぬなり

羽村美和子

ねこじゃらし風の縁者と答えおく
鶏頭花月光浴びては骨になる
国というまぼろし真夜の烏瓜
大白鳥空の動悸が止まらない
幸福論蜜柑金柑仏手柑

諸家近詠

永井アイ子

コルク栓転がっている七日かな
ぬかるみにほうりだされし冬青空
雨脚の折れてぶつかかる夜長し
排水口出かかっている寒波かな
鳥交る野地蔵の影ささくれる

永妻 和子

男拗ねミモザは空に声を上ぐ
反物の色とりどりや蝶の昼
絶壁に霞たなびき宿の朝
スタッフは揃いの半纏春キャベツ
蝶の空列はみ出せぬ下校の子

袴田 菊子

さて誰と桜の話しようかと
鉄塔の放さぬ春のはぐれ雲
春愁の出口を捜す昨日今日
啓蟄やまずデパートにまぎれ込む
夕風に向ふ屋根越ゆ飛花落花

中村 直子

蓮の実とんで晴ればれとわが山河
この橋の向こうは戦後冬桜
人声の流るる真昼葦の角
やわらかくとしつき重ね花筏
さわさわと葉桜憲法第九条

原島 典子

石につまずき山に躓きなめくじり
かたつむり辛抱強く待ってもらう
蝶々と花をゆすっただるい午後
千年も菜の花黄どきんとしあわせ
桜並木どこでも幸せの入口

浜名 儀一

ゆるやかに動く山河や燕来る
書を積みし廊下の暗がり沈丁花
店先の西瓜こんな小ざくなり
原稿に残す余白や秋暑し
万物の影を伸ばして冬日落つ

広瀬 悌子

飴ぶくろ石段擦って七五三
粗塩で洗う俎板十二月
老いてなお生き抜く力入道雲
膝小僧もあるく暮れる晩夏かな
和菓子やの店員ピアス事始め

日野 葉子

若葉はや屈託の解かれけり
優しさを体現したる合歓の花
梅雨長し帰宅の父の肩車
道祖神面差しゆるむ梅雨晴間
母好む祭に父の無頓着

なかもと 淑子

掃きためて玉椿まだ赤い
鉛筆の芯やわらかく春浅し
三姉妹べんべん草を鳴らそうか
隣室の気配アゲハは羽化したり
金魚らの機嫌たずねる立話

西澤 繁子

梅真白拳が涙ふいており
シーサーの屋根に踏ん張る春疾風
春雨に音の膨らむ汽笛かな
ポルトガル想えば春の金平糖
春めけるもの一つにグライダ―

馬場 馬子

若布採りなかにピアスの子が一人
路地奥は俳人の家白菖蒲
竹の春羅漢の中に若冲像
オバマ氏の紙鶴猷悼年暮るる
初夢や北のミサイル飛んで来る

富澤さち子

修正のきかぬ自画像野火走る
料峭の真珠ひとつぶごとの黙
汗が眼に染む吐息とも許しとも
あめんぼう性善説を迷いなく
流星へバックバックを手放せり

中村 冬美

天空はいつも憧れ花こぶし
月見草星のひとつを誘い出す
真実を明かさぬままに桜蕊
姥捨ての風説遠し山桜
真つ直ぐな目差し眩し麦の秋

野口 京子

チヨコレート四月の匂い丸くあり
蜥蜴飼う少女のまなこ濁りなき
「星狩」の青のプリズム蝶潜む
暴言の一掃牡丹の風荒れる
あどけなさ疾うに捨てたる葱坊主

長濱 聰子

亀鳴くやお袋という無限大
卵の花腐し舌一枚をもてあそぶ
蛇低く唸りて父という孤独
雲の峰黙は女の挑戦状
血脈に不連続線のみみず鳴く

私の感銘句

松戸 圭

作者名 号頁

街に来て百合はネオンに疲れたる
煮凝は骨閉じ込めるための嘘
おもわず咳おもわず許す純喫茶
誰からも遠い時間を木の実降る
初秋のひとすじ受胎告知かな
人形は振り返らない燕帰る
一滴に無限の真昼しゃぼん玉
青春の日のちろる晩年の大ちろ
速き日の野焼きの火炎服で打つ
わが影の上に影あり十三夜
おもわず咳おもわず許す純喫茶
山中 葛子
深読みの出来る瞬時の臨場感を巧に表白して
いる。今や少くなつた純喫茶静謐な店内に流
れるクラシック音楽—モカの香り老店主のた
づまいが映像として見えてくる。若き日の回想
がノスタルジックな感慨を誘う。野暮な穿鑿は
止めて薄れゆく昭和の青春讃歌として捉えたい。

イザベル真央

炎天より敗残兵のごと帰宅
一陣の風に押されて卒業す
足裏刺す福豆入りのスニーカー
曼珠沙華女に刃物火の匂い
蔓たぐりあるひとりとはこんなもの
茶が咲いてむかしわれらに擦過傷
十二月鰯を使ってあるくなり
待つ事も待たれる事も無き夜長
原爆忌しかな木からしゃべりだす
あぢさるは心配性の母の色
一陣の風に押されて卒業す
松本 静頭 120 3
東 國人 121 7
岡山 敦子 122 4
小野 裕文 123 4
片山 依子 123 4
塩野谷 仁 123 4
小林 実 123 4
斉藤すず子 123 6
重田 忠雄 123 6
松本 千花 123 10
東 國人 123 10

自分ひとりの力は、わずかであつても置かれ
た環境、出会つた人々の力を相互に受けとめて、
それら一陣の風に押されて卒業して行つた。
若い時は風に逆つたり、吹き飛ばされてしま
う事もあるだろう。一陣の風を感じられる幸福
とりあえず、卒業おめでとうございます。

岡田 春人

雨の日は雨の詩を詠む沈丁花
留守電に残り父の声を聞く
寒いねと家なき猫に声かける
春立てり嫁した娘の部屋で大の字
しゃぼん玉世界の終りまで五分
席取りの小袋を置き菊日和
微のひらき切るまで親である
ひとりにはひとりがかかる水中花
硝子切る静けさにあり蟻地獄
噓して話が飛んでしまひけり
寒いねと家なき猫に声かける
山口 夕紀
内容は異なるが、表現は短歌の「サラダ記念
日」の俳句版といったところ。

ご主人を亡くされ、ひとりになったご婦人が、
通りかかった公園の木の影で丸くなつて野
良猫に声をかけたのである。日常のちよつとし
た感情を、平明に表現した。

若い人や忙しい人では、こんな気持にはなれ
ないが、少しさみしく、それをさみしいと言
えず、寒いねと猫に声をかけた。ほんとうはさ
みしいのだ。

柏井 笙

晩年の余白めく日の日向ぼこ
ゴムまりのような童女と枯野行く
恵方へとまわり道して若がえる
森 孝子 120 3
柳沢 純 120 3
山崎 政江 121 6

春蘭ハルランとも呼ばれ紅紫の斑入り
春の空仰ぐ羅漢の百面相
知恵の輪のはずれない日の蜃気楼
手動ドア向こうは未来山桜
パン提げて秋夕焼を見ておりぬ
大の字も川の字も好き畳替
行くわよと手を振る妻や冬銀河
佐久間真城 123 5

山崎 幸子

蕉風に松と竹あり初句会
京都から白い人来る冬が来る
梨齧るなんと淋しい甘美かな
ぎしぎしの花戦争にきて死せり
無国籍料理とりどりの春野菜
竹皮を脱ぐいちまいは古代裂
サングラス外し東郷青児の絵
産声は呼吸の始め木の芽立つ
尊厳死白桃の種が大きい
蒲の絮小伝馬町を通りぬけ
竹皮を脱ぐいちまいは古代裂
菊地 京子 123 6
高台寺の庭園の一角に竹があり、丁度竹が皮
を脱ぐ様子が見られ名園の魅力と共に感動した
ことを思い出す。竹林の中に佇むと『竹取物語』
や『源氏物語』が浮かんで来る。あちこちの竹
が皮を脱ぎ始め、その中の一枚に遠き日の女官
の着用したであろう古代裂が混じつていたとし
ても違和感はない。掲句にはロマンと巧みな詩
情を感じる。「古代裂」がしっかりと決まっ
て好きな作品でもある。

椎名 鳳人

冬薔薇に宇宙の匂いらしきもの
鶏頭の良し悪しを突く庭の鳥
実初 繁 120 3
横須賀洋子 120 4

明石春潮子 121 7
 石井紀美子 121 7
 青木 一夫 122 2
 岡田 淑子 122 3
 加倉井允子 123 4
 倉岡 けい 123 5
 金田めぐみ 123 6
 荒木 洋子 123 6
 金田めぐみ 123 6
 明石春潮子 121 7
 石井紀美子 121 7
 青木 一夫 122 2
 岡田 淑子 122 3
 加倉井允子 123 4
 倉岡 けい 123 5
 金田めぐみ 123 6
 荒木 洋子 123 6
 金田めぐみ 123 6

蓑虫が鬼の子と言われることと成虫になって
 も蓑の中にいるのは雌であるということを知
 であるが鳴く声を聞いた人はいないであろう。
 また蓑虫は道路のガードレールに集団でへばり
 ついているというのも本当のことだそうだが筆
 者は未だそれを見たことがない。

さて掲句は蓑虫同士が甲と乙の仲とは誠に言
 い得て妙である。甲乙とは優劣の意味も含まれ
 るが、この句の中ではとつても良い仲なのであ
 ると鑑賞した。

村上千代美

アナログの一人の世界冬仕度 森 ふみ子 120 4
 鉄路より挙がるランタン冬の旅 柳本 ゆみ 120 4
 深秋の毀れる砂を掻き集め 三好美穂子 120 5
 おもわず咳おもわず許す純喫茶 山中 葛子 120 5
 うとうとと狛犬はらはらと桜 増田 元子 120 5
 誰からも遠い時間を木の実降る 塩野谷 仁 123 4
 人生ゲーム枯野に橋を探しおり 倉岡 けい 123 5
 実石榴の直系名乗る一区画 小池美佐子 123 5
 サバンナ遠したてがみに桜しへ 荒木 洋子 123 6
 地酒一本新米のにぎり飯 窪田 俊作 123 6

小張 直子

新しみ心の鈍化初日影 実 繁 120 3

戦前の亀のごとくに生きて冬 山崎 聰 120 3
 翔つ鳥の影が障子に福寿草 山中とみ子 120 4
 恵方へとまわり道して若がえる 山崎 政江 121 6
 震災忌掌ほどの地蔵さま 井上きよ美 122 2
 疑いの深まってくる朱の牡丹 青木 一夫 122 2
 薇のひらき切るまで親でゐる 伊藤 希眸 122 2
 一木を人体としてどう芽吹く 菊地 京子 122 3
 蛸料に足ラストダンスの靴がない 加倉井允子 123 4
 地の底も良夜なるべし樹木葬 椎名 鳳人 123 4
 地の底も良夜なるべし樹木葬 椎名 鳳人 123 4

地の底も良夜なるべしと作者は断定し、読み
 手の私にはこのフレーズに魅力を感じた。そし
 て現代ではお墓がお寺の墓地とは限定されな
 くなった。空、山、海、樹木葬と様々な形態を選
 択出来る。又土葬から火葬に変わり現在は樹木
 葬に迄なった。樹木葬の場合骨壺は最大四個ま
 で収納可能との事、その点を考慮し樹木葬を選
 び人生を終焉するのも選択の一つの方法である。
 “地の底も良夜なるべし樹木葬”大変感銘を受
 け感謝!!

泉 志眞子

ひとひらはあそばせておく夕桜 馬淵 津枝 120 3
 水で割る火の国の酒月おぼろ 三苦 知夫 120 4
 行くところまで行くつもり花筏 相原 一枝 121 7
 反戦も木霊となつてくる田打 明石春潮子 121 7
 針穴より見ている俗世亀鳴けり 石井紀美子 121 7
 茅花囀む故郷離れるまで少年 阿部 良治 122 2
 だまされてやるか白玉よく冷えて 加藤 法子 122 2
 稜線の向こうが見たい蕎麦の花 興津 恭子 122 3
 曼珠沙華女に刃物火の匂い 小野 裕文 123 4
 日の暮の母はいまころ蕎麦の花 下村 洋子 123 6



創立70周年記念

第54回現代俳句全国大会

作品募集
投句締め切り
7月31日(必着)

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催（毎日新聞社後援）して行う伝統のある大会です。
 協会員に限らずどなたでも参加できますので、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。
 応募規定他詳細は「現代俳句」4月号をご覧ください。

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二九七回(平成二十九年二月十四日)

司会 イザベル真央

廁から空咳ひとつ山頭火
 ほとけさまイヌフグリは斯く在りぬ
 前略中略後朝の恵方巻
 これで良し梅の香ほどのいまあれば
 カレンダー剥ぎ取る音の余寒かな
 虎落笛女やさしい錦糸町
 千葉産も外国産も春野菜
 射程距離その真中で狸そば
 先客の幼稚園児の梅見かな
 バレンタインチョコ人肌に温まる
 春空の深いところで鈴が鳴る
 黄水仙の一本カインに追われたか
 蜂蜜の箆から垂るる建国日
 花八手籠ればきしむ蝶番
 親鳴けば子亀孫亀みな鳴けり
 含羞の万能選手寒しじみ
 恋したらイチオクターブ上げる猫
 大空へ消える幼な児ゴム風船
 冬の空九条守れ官邸へ

●第二九八回(平成二十九年三月十四日)

司会 池田 博臣

老いながら雛人形になられけり
 さえずりにうながされる鳩時計
 木の芽風まだ昔風と呼ぶべきか
 蛇穴を出づ歌舞伎町にゴジラ
 啓蟄や朝礼台を塗り替える

徳吉洋二郎 松崎あきら 佐藤 晏行 林 阿愚林 前島きんや 吉野 精 股野 久子 岡田 淑子 深山きんぎょ 白木 暢子 楠見 恵子 小林 実 イザベル真央 村上 澄子 榎垣 梧樓 なかもと淑子 金子 未完 池田 博臣 大塚 弘毅 楠見 恵子 岡田 淑子 横須賀洋子 村上 澄子 林 阿愚林

無理だ無理だサクラに調律される
 減塩うどんしづかにすする春の昼
 白樺若葉を見たら死んではダメ
 鉛筆の芯やわらかく春寒し
 金色の象の列なり春の夢
 断腸出づ女子レスラーの眼つきして
 とうとつに止まる秒針胡沙来る
 飽食の大びんぼうや大おぼろ
 体操の人今日よりは春セーター
 椿踏んでベルソナ・ノングラータの如し
 塩せんべいぱりとうすらいわれました
 生足の踏ん張っている春二番
 ごらん君黄色がちなる春の虹
 春待つ日部屋に流れるカンツォーネ

●第二九九回(平成二十九年四月十一日)

司会 金子 未完

さくら散る土偶が口を開けている
 ぶらんこポルトガルには船で行く
 恋人を始末せぬまの桜かな
 猫の妻らし遮断機の上り待つ
 夏近し翔び立ちそうな鳩サブレ
 おおぞらに流線型の鳥の恋
 テーブルの脚のガタガタ鳥雲に
 田螺の国情報が洩れて困る
 団らんの遠きにありて草だんご
 春のくしゃみやみ八千草薫さんでしょ
 白木蓮向き定まりて饒舌に
 なりゆきにまかせて大姥桜咲く
 掃きたためてなお紅々と玉椿
 腹の底見せて寄りくる春の鯉
 踏み踏みてだんだん怖い桜かな

竹中 華那 佐藤 晏行 松崎あきら なかもと淑子 イザベル真央 金子 未完 池田 博臣 山中 葛子 股野 久子 榎垣 梧樓 吉野 精 徳吉洋二郎 小林 実 白木 暢子 徳吉洋二郎 小林 実 横須賀洋子 佐藤 晏行 岡田 淑子 楠見 恵子 前島きんや 金子 未完 池田 博臣 松崎あきら 股野 久子 山中 葛子 なかもと淑子 村上 澄子 林 阿愚林

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館)

●第六十八回(平成二十九年二月二十三日)

司会 徳吉洋二郎

余生では無い淡雪又降り来たる
 春は別れの円座の上のお尻
 沈丁の香りをほどく水明り
 穫り残されし白菜は水琴窟
 天窓は真白き渚鳥帰る
 奇術師が少女輪切りにする春夜
 ふぐに肝九州男子に二言なし
 二月尽音なく膨る夜の潮
 婆が来て日向にしゃがむ桃の花
 さきがけの梅一輪の氣息かな
 沈丁花いにしへの妃のここに
 廃屋の今年も増えて山笑ふ
 菜飯食う母ありし日を呼び寄せて

深山きんぎょ 竹中 華那 吉野 精 白木 暢子 大塚 弘毅 榎垣 梧樓 細野 一敏 小林 実 石井紀美子 並木 邑人 細根 葉 越野 雄治 徳吉洋二郎 長濱 聰子 加藤 法子 鈴木まんぼう 吉野 精 山崎 幸子 馬淵 津枝

津田沼研究句会
 日時 毎月第二火曜日午後六時より
 場所 習志野市津田沼一丁目町会会館
 問合せ先 横須賀洋子
 (電話〇四七一一三〇〇〇)

米大統領とゴルフ紀元節 棗 楢伊
 落ち椿話し空中分解 三須 民恵
 料峭の神前日向を拾う栗鼠 矢野 忠男

●第六十九回 (平成二十九年三月二十三日)

司会 小林 実

駒の出る瓢箪ならば詩いてみる 細根 葉
 春がすみ面売り生の顔を出し 小林 実
 叩かれて畦生さかえる春の昼 加藤 法子
 春大根新妻という忘れもの 馬淵 津枝
 白木蓮少年むやみに過敏 石井紀美子
 逆走する秒針沈丁香の記憶 松崎あきら
 仕方のないこと寒桜は轍 竹中 華那
 戦跡のたそがれ董と深き洞 鈴木まんぼう
 解散のあとは無所属蝌蚪の紐 長濱 聰子
 桜の芽やへそくり無しと遺書に書く 細野 一敏
 山姥を泣かせぬように土筆摘む 並木 邑人
 ふらここや円周率の尽きるまで 徳吉洋二郎
 はこべらやどこにも未来落ちてない 三須 民恵
 陽炎の中よりワーブ父に会ふ 山崎 幸子
 晩霜やカラシニコフの銃の上 越野 雄治
 庄助を決めた積もりの春の風邪 矢野 忠男
 奨学金返済背負ひ卒業す 棗 楢伊

●第七十回 (平成二十九年四月二十七日)

司会 細野 一敏

光背を脱ぎし菩薩が野に遊ぶ 細根 葉
 深海魚夜の桜へ上りゆく 鈴木まんぼう
 プロペラのふぬけな音や花曇り 馬淵 津枝
 しずかなる狂気満開の夜桜 長濱 聰子
 うぐいすの決り文句を聞いてやる 加藤 法子
 平凡な駅だ山の蟻二匹 小林 実

たかが石されど石風光る 細野 一敏
 桜ちるちるシヨパンの曲になつてゆく 吉野 精
 花の宴共謀罪を問われおり 徳吉洋二郎
 五階四階一階地階タンクシュート 並木 邑人
 風光るピカソの青の中において 石井紀美子
 パナマ帽転がり行けど父遠し 越野 雄治
 いい角度に空はあく銀杏若葉 竹中 華那
 春の朝観光バスを乗り違ふ 棗 楢伊
 右左閃光はしり瑠璃蜥蜴 矢野 忠男
 夏ささすネイルアートの発光す 山崎 幸子

青葉研究句会

日時 毎月第四木曜日午後二時三十分より
 場所 千葉市民会館
 問合せ先 矢野 忠男
 (電話〇四三二二五二一四三三八)

柏研究句会報告

●第五十七回 (平成二十九年二月十一日)

司会 下村 洋子

春寒や中途半ばはな箱こわす 野口 京子
 研ぎすます羅漢百体露の臺 小林 俊子
 鳥帰る畔にチエロ弾くをとこゝろて 佐藤 鈴子
 春の風邪恋の相手が若過ぎる 岡田 春人
 逢えばいま真下に落ちる藪つばき 下村 洋子
 鳥雲に入りて蔭膳据えよかな 栃木 きよ
 天を射す木の芽かすかに烟りゐて 井上けい子
 菜花咲く子豚ら母乳まさぐれり 高橋 宗史
 申します申しますとて初電話 長井 寛

●第五十八回 (平成二十九年三月十一日)

司会 佐藤 鈴子

雪解川還らざる声透明に 野口 京子
 口論に余白ありけり日なたぼこ 栃木 きよ
 天辺は霞樹齡の一つ殖ゆ 伊藤 希眸
 自由とは鳥のイメージ木の芽雨 高橋 宗史
 聖戦という錯覚海市立つ 下村 洋子
 六たびの三・一一さくらの芽 井上けい子
 墓穴を出で南京袋纏う 長井 寛
 野遊びのカレイドスコープみだらなる 木之下みゆき
 乳ふませてアカハタを読む昭和 松澤 龍一
 母になる前から強し猫の恋 岡田 春人
 春浅しパンダの短き繁殖期 佐藤 鈴子

●第五十九回 (平成二十九年四月八日)

司会 佐藤 鈴子

桶に箍地球に十重の花の帯 長井 寛
 春めきて鎌倉大仏良い男 小張 直子
 歓喜する桜ぶぶきに竦みをり 栃木 きよ
 「百年の孤独」マルケスの国の春 高橋 宗史
 茅葺きの紡ぐ風音仏生会 小林 俊子
 見尽くしたはずの桜にまた溺れ 下村 洋子
 靖国の若きみ魂や花万朵 井上けい子
 暗殺の記事に包んで春大根 岡田 春人
 花曇りひとり二人と未亡人 伊藤 希眸
 鳥帰るペン一本の反戦歌 佐藤 鈴子

柏研究句会

日時 毎月第二土曜日午後一時より
 場所 柏市柏三丁目「ハックルベリー書店」
 問合せ先 長井 寛
 (電話〇四七四四五一二五四九)

新会員・会友紹介

柏市西柏台 富田 茂(会員)

(推薦者 秋尾 敏)

上着脱ぎ肩軽くなり水温む

風も止み蕾の中に木瓜三輪

自然保護子供と交す春の暮

香取市佐原 菊池 和子(会員)

(推薦者 秋尾 敏)

車椅子華麗にターン春きざす

君の胸飛び込む勇氣五月来る

夕闇に大き鼓動の白牡丹

野田市中野台 堺 房男(会員)

(推薦者 秋尾 敏)

山茶花のつぶやき宙まるくなる

羅やくの字のあゆみ背のみやび

衣被あられもなくて頼ゆるむ

千葉市稲毛区 浜岡 紀子(会員)

(推薦者 川村 研治)

うぐひすの余白に息をつめてゐる

鳥雲に入るがたがたと洗濯機

花の刻すぎれば人は老いにけり

図書紹介

■句集『星狩』 清水 伶

平成二十九年三月三十一日 本阿弥書店

キリストの涙よ冬の青草よ

人の死へけぶるまで独楽回しけり

たましいを華とおもえば霰ふる

ひろば

■市原市春季俳句大会

四月二十二日、五井会館において三枝かずを千葉県俳句作家協会副会長を招聘して開催した。兼題の部は県内から五四九句、当日の席題句会は五十七名の出席を以て実施した。(並木邑人記)

☆兼題の部／燕・道・雑詠三句一組

市原市長賞

村々に水行きわたり燕来る

稲澤 雷峯

市原市俳句協会賞

浅蜷売海をこぼしてゆきにけり

井原 美鳥

市議会議長賞

燕来る夕べの雨の匂ふ町

大内田芳乃

教育長賞

百年を閉ぢる校舎や夕燕

藤原 成弘

☆席題の部／畦塗・虻

市原市長賞

聞き流す術も身につき畦を塗る

佐々木結花

市原市俳句協会賞

半眼の牛の尾ピシと虻を打つ

米川喜美代

市議会議長賞

虻低く唸りて父という孤独

長濱 聰子

教育長賞

せせらぎの音を集めて畦を塗る

小多田文子

■第二回千葉県俳句大賞

五月二十一日贈賞式が開催され、当協会員で現代俳句協会副会長の鳴戸奈菜氏が千葉県俳句大賞を受賞された。詳細は次号に掲載予定。

大賞 句集「文様」 鳴戸 奈菜

準賞 句集「間取図」 広渡 敬雄

奨励賞 句集「銀の笛」 栗原 公子

《会員・会友の近況》

・俳句のユネスコ無形文化遺産登録をめざし、昨年発起人会が設立され、活動を始めたという。俳句の国際化は叫ばれて久しく、先達者の海外における活躍も既にあるが、「俳句は自然と共生する文学であり、世界平和にもつながる」とのアピールは素晴らしい。

(関根 信三)

・昨年はアメリカ・ロッキー山脈の三千米級の二座(夏)、ヨーロッパ・ドロミテとチロルの山群や独逸国境の最高峰(秋)に立ちました。登山電車・ロープウェイ・ケーブル等を利用し、登山とは言えませんが好天に恵まれて大展望を満喫しました。

(田端 重彦)

・春とはいえ余寒きびしき折、年齢にはさからえず、足腰弱って外出もままなりません。こちら県のはずれで現俳はほとんど皆無の状態。孤軍何とか生き耐えています。

(中村 棹舟)

・有名作家が次々亡くなり、その人たちに自分
分は支えられていたんだとやつと分かる
“やれやれ” (普川 洋)

・あの人達に逢いたい、もう一度あいたい。
その一心でふるさとに向かいました。やさ
しい里言葉なつかしい顔、山、川、限界集
落といわれる里には春の雪が舞っておりま
した。 (永井 奈々)

・只今「のちの事ノート」に何を書くべきか
ノートを前に考えています。ひとりひとり
寿命があるように余白をみつめ哲学してい
る昨今です。 (畠 淑子)

・五月二十三日から二十八日まで、千葉市美
術館の第九回工倶楽部千葉展に絵画を数
点出品しました。 (樋口 博徳)

・だいぶ前から毎朝、ラジオ体操をし近所を
散歩する。週に一回、ヨガ教室に通い八年
になる。だが近頃、体調がよくない。私は
七十半ばに差し掛かったが、やはり年齢に
は抵抗できないようだ。 (鳴戸 奈菜)

・自然の移ろいを楽しみつつ、句作を楽しん
でおります。 (中村 直子)

・諸先生方、文芸誌など参考に余生を楽しん
でおります。 (馬場 馬子)

・四月二十三日(日)野田俳句連盟の春季大
会があり、今回で第一四六回目を迎えまし
た。欠席投句者も合わせて九十一名の参加
者があり、盛会裡に終了致しました。

(野口 京子)

掲示板

《会員・会友異動》

● 逝去 (会員) 神津富士子

● 退会 (会員) 伊藤典子、坂本正夫、
芝崎 梓、嘉悦羊三、
浜谷 徹

● 転出 (会員) 松戸 圭 (東京都多摩市へ転出)

● 俳名変更 (会員)

日吉亜弥子(旧俳名日吉白米
市川ふみお(旧俳名市川 進

平成二十九年年度第二回幹事会

日時 平成二十九年五月二十三日(火)
午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、平成二十九年年度総会・俳句大会の結果、
収支報告等について
- 二、各地区協総会・俳句大会の報告について
・ 神奈川県 ・ 東京都区 ・ 多摩地区
- 三、春の吟行会の結果、収支報告等について
- 四、秋の吟行会の計画について
- 五、第一二五号会報について
- 六、現代俳句協会(本部)の動向について
七十周年記念全国大会その他
- 七、関東甲信越静ブロック連絡会議について
- 八、各研究句会の状況について
- 九、平成三十年年度俳句大会について
その他
- ① 会員・会友の入退会状況
- ② 次回幹事会 八月二十九日(火) 予定
- ③ その他

事務局・編集部だより

● 新体制が発足して一年が経ちましたので、
秋尾会長から皆様へのメッセージを巻頭に
掲載いたしました。熟読下さい。

● 三月十九日(日)の定期総会・俳句大会、
四月二十九日(祝)の春の吟行会と多数の
ご出席、ご参加有り難うございました。

● 毎回のことですが、この会報を通じ会員の
皆様と繋がっているのだと認識しておりま
す。総会は会員の過半数をもって成立しま
すが、今回は委任状を含め、72%に達しま
した。しかし裏を返せば28%の方からご返
事が頂けませんでした。その観点からも会
報の重要さを感じております。皆様どうぞ
宜しくお願いいたします。

現代俳句千葉 第一二五号
平成二十九年六月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
会長 秋尾 敏

現代俳句千葉編集部
〒261-0004 千葉市美浜区高洲
三十五-六-一六〇二
徳吉洋二郎

千葉県現代俳句協会事務局
〒278-0043 野田市清水五
高橋 宗史
TEL・FAX 〇四一七一二五-三三八二